

地域と歩む

佐久間 ダム 60 年

上

終戦から8年後の1953年、磐田郡佐久間町(現浜松市天竜区)で米国製大型重機のこう音と、発破の爆音が響き始めた。3年後に完成したのは高さ約155㍎、幅約295㍎の巨大ダム。当時では考えられない外国の技術や機械に驚かされてばかりだった。高校卒業後、地元に戻り臨時職員として工事に携わった佐久間地区社会福祉協議会会長の中野侃治さん(82)は懐かしそうに語る。

佐久間ダム建設は、戦

巨大事業で繁栄



建設中の佐久間ダム。米国製大型重機がうなりを上げ、発破の爆音を山あいにも響かせた(電源開発＝Jパワー＝提供)

後復興期の慢性的な電力不足を解消するため、政府出資主体の電源開発(Jパワー)が手掛けた最初の巨大事業。暴れ天竜をせき止めて造るダムには、当時の国内外の最新技術が駆使された。

集まった工事関係者も3千人に上った。町には歓楽街が生まれ、建設に携わる男たちが闊歩(かつぱ)した。56年にダムが完成すると、昭和天皇も訪れ、町はダム目当ての観光客であふれ返った。

山あい開発に最新技術

佐久間ダムの歩み

- 1953年・ダム着工
- 56年・佐久間発電所が発電開始
ダム完成
- 57年・昭和天皇・香淳皇后がダム視察
- 65年・佐久間周波数変換所が運転開始
- 82年・佐久間第2発電所が発電開始
- 2001年・国土交通省が天竜川ダム再編事業の構想を発表

最寄り駅の中部天竜駅(JR飯田線)からダムまでバスが運行し、ダム湖には遊覧船も浮かんだ。休日には1日1万人以上の観光客が詰め掛けた。

中野さんも「完成時に見上げたダムのスケールの大きさと、(昭和)天皇陛下に来ていただいたことが今でも印象に残っている。建設する立場にいた人間として誇りに感じる役割も伝える。

じた」と振り返る。

ダム完成から約10年間、佐久間町中部地区の商店街には、映画館やパチンコ店などの娯楽施設をはじめ、50店舗以上が並んでいた。

当時の商店街の一角で暮らす平賀孝晴さん(84)は「全国各地からは国の巨大事業の成功を目に焼き付けようと、観光バスに乗った大勢の人々が訪れた。ダムが完成したことによって町全体が裕福になった」と半世紀以上前の町の様子を今も鮮明に覚えている。

戦後土木技術の原点といわれた佐久間ダム。今月で完成から60年を迎えた。当時の工事の様子や完成後の地域の繁栄、衰退した現状など、地域とともに歩んだ歳月を振り返り、今後ダムに求められる役割も伝える。

地域と歩む

佐久間

ダム 60 年

中

「当時は商店街が人であふれていた。今は歩いてても、ただただ寂しいだけ」。浜松市天竜区佐久間町中部地区でキャンプ場を管理する丸山弘人さん(88)は衰退した地元商店街を眺めながら嘆く。1956年にダムが完成して約20年後、地域の産業は衰退に向かい始めた。かつて50以上の店が並んだ商店街には現在、

見掛けぬ若者

衰退歯止めへ動く企業



衰退した商店街を眺め、現状を語る丸山弘人さん
＝浜松市天竜区佐久間町中部

10店舗ほどしか残っていない。56年の佐久間町の人口は2万6千人。78年には約1万人を切り、現在は約3800人まで減少している。

た。中でも子どもや若者の姿をあまり見掛けなくなった。佐久間小と蒲川小の児童はともに27人、佐久間中の生徒は59人。県立佐久間高も来年4月から浜松湖北高の分校になる。「働く場所がなくなったことが大きな原因。浜松市中心街や愛知県豊橋市に引っ越す人が増えた」と丸山さんは語る。

過疎化が進む中でも、ダム事業を手掛けた電源開発(Ｊパワー)グループの社員は現在、佐久間に99人が暮らす。そのうち26人が佐久間町出身者。丸山さんは「衰退した佐久間で残る貴重な企業。地域の若者を積極的に集め、活性化につなげてほしい」と期待する。

佐久間高OBでグループ会社ＪＰハイテック佐久間事業所の春藤健一さん(59)は、愛知県の専門学校を卒業後に就職した。「最先端の技術を使っている感じがする」と話している。

「今まで通り、地元民として地域に貢献したい」と力強く語る。

佐久間電力所の坪田吉和所長は町外の出身だが、町の衰退を何とか食い止めたいたいと思っている。「『フェスタさくま』や『ダム竜神まつり』など地域に根差したイベントに積極的に協力していく。今後も地域とともに歩んでいきたい」と言葉に力を込める。

静岡新聞社編集局調査部許諾済み

地域と歩む

佐久間
ダム 60 年

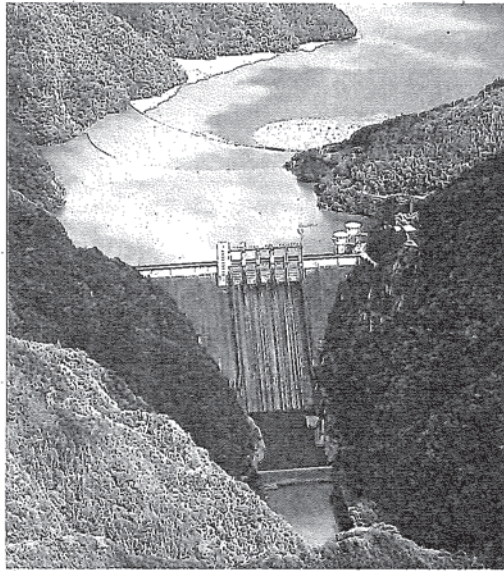
▼下

水力発電を目的とする佐久間ダムに洪水調節機能を持たせ、ダム底にたまった土砂を下流に流す国土交通省の「天竜川ダム再編事業」構想が発表されたのは15年前。ダムの長寿命化や遠州灘海岸の浸食抑止に加え、河川氾濫対策にもつながると大きな期待を集めたが、事業は難航している。佐久間ダムの総貯水容量は3億2685万立方

再編構想15年

堆積土砂の放出進まず

ダム底にたまった土砂を下流に流す計画をしている佐久間ダム。事業は難航している。浜松市天竜区佐久間町（本社ヘリ「ジェリコ1号」から）



以て、国内有数の規模を経てダム底内の累積土砂誇る。天竜川は地質の量も1億2千万立方メートルの中央構造線沿いを流超え、貯水能力は年々低れ、ダムへの土砂の流入下している。国交省は2008年度

から、ダム湖と下流を結ぶ排砂トンネルを建設し、水位差を利用して水と一緒に土砂を流す吸引工法の検討を始めた。しかし、土砂が粘性だったため、吸引部に目詰まりが頻発し、12年度末に適用は難しいと結論付けた。現在は船などで土砂をすくい、いったん陸揚げして放流時に流す工法を検討している。実証実験を重ねているが、当初の目標としていた21年度末の事業完了は難しい状況になった。

近年、集中豪雨による堤防決壊などが国内各地で発生し、改めて抜本的な対策が求められている。天竜川では近年大きな氾濫は起きていないが、1982年に台風などの影響により鹿島水位観測所（天竜区）で避難判断水位を超え、家屋の浸水被害も発生した。

国交省浜松河川国道事務所の担当者は「土砂が沿岸部まで届けば、洪水時に天竜川や支流の水位を確実に抑えられる」と効果を強調する。ただ、支流との合流地点の土砂堆積などを懸念する声も上がる。浜松市天竜区佐久間町自治会連合会長の山口祐一さん（78）は事業の意義に理解を示しながらも、「本当に支流が氾濫する恐れはないのか。住民の生活に及ぼす影響が気がかりだ」と不安を口にする。

（水窪支局・青木功太、浜松総局・寺田将人が担当しました）